

史料報

第 41 号

昭和59年 9 月

史料保存と歴史資料館

梅津 保一

芭蕉・清風歴史資料館事務局長
山形県立新庄北高等学校教諭

一九六〇年代に急速にすすめられ

た「高度経済成長」政策は、都市への資本と人口の過度集中と農山漁村の産業の荒廃と人口の減少をいっそうはげしくした。そのため、農山漁村では地域社会の基盤がくずれ、地方自治体の行財政も危機にみまわれ生きがいのある仕事と快適で文化的な生活環境を保障できず、廃村が全国にわたって出現するという深刻な事態がうまれている。

こういう状況のなかで、自分たちが住んでいる地域の歴史を明らかにするということは、住民の一人一人に生活の道しるべを提供し、住民に勇気と確信を与えることができるのではないか。そう考えて、私たちは

いま地域の歴史と文化の掘りおこしを自らの手でやっている。

私たちの尾花沢市は、飛驒の高山越後の高田、出羽の尾花沢といわれて、日本の三大豪雪地帯に数えられている。江戸時代の尾花沢は、幕府代官所の北限にあたる陣屋町としてまた羽州街道の宿場町として知られていた。行政的には「村方」であるが、当時においては町分・町場・在町などによばれる、都市と農村の中間的品格をもつ在郷町として発展してきたのである。在郷町尾花沢は、戸数四百戸、人口二千八人前後に止まり、代官陣屋や人馬継立ての宿場、あるいは定期的に市場・馬市が立てられる雪の深い里であった。尾花沢には、きびしい自然条件と社会条件

目次	
史料保存と歴史資料館	梅津 保一……………(1)
特殊形態の史料の取扱	原島 陽一……………(4)
奥三河農村における年貢免状について	鶴岡実枝子……………(6)

「徳島藩職制取調書抜」(上・下巻)の索引作成 広瀬 睦
史料所在調査報告 広瀬 睦
史料協・関東部会設立準備会参加記
受贈図書・彙報……………(24)(10)(8)

のなかで米づくりにばげんできた農民と、宿場町を背景に成長してきた商人の町として、他地域と交流し、文化をはぐくんできた歴史がある。

私たちは、いま、こうした過去の歴史の上に立っているのである。私たちは地域の自然と歴史と文化を正しく住民のものにしていく地域史研究・運動が、いまほど必要となさけないと考え、一九七三年十一月、「尾花沢の歴史を語る会」を結成した。

「歴史を語る会」は、減反を中心とする農業危機意識から一九七一年に生まれた「尾花沢農村問題懇話会」が発展的解消してできたものである。「尾花沢農村問題懇話会」が最初に取り組んだのは、昭和初期の地域の農民運動である。運動に携わった人たちがあいついで亡くなっていくなかで、私たちは生存者からの聞き取り調査を始め、一九三〇年代の農村と現在の農村をつなぐ学習運動を展開したのである。

この学習運動の中心メンバーが、一九七三年五月以降、PTA発行の「眼で見る尾花沢小学校教育百年史」編集に取り組むことになり、学習運動と教育百年史の編集が結合して「尾花沢の歴史を語る会」が生まれたのである。

「尾花沢の歴史を語る会」は自分たちが住み現に生活している地域がどのように形成されてきたか、また地域住民が歴史的にどのように成長してきたかを追求し、市民としての正しい歴史意識を高めることを目的としている。月一回例会をもち、現地調査や古文書整理・解説を通して、地域の自然と歴史と文化を正しく私たちのものにするために、地域の歴史の掘りおこしに取り組んできた。「歴史を語る会」の活動は、市内の小中学校児童生徒の社会科研究に影響を与え、地域研究に焦点をおいた研究発表会を実現させた。さらに一九七四年四月から尾花沢市史編纂の仕事で「歴史を語る会」のメンバー

が中心となつて行なうことになった。

市町村史の編さん事業そのものは直接的には当局、本来的には住民の未来への展望と期待とによつて発足したものである。編さんにたずさわる者にとつて、地域の歴史像をどう構築するかは重要な課題である。地域史の編さんは、地域の大きな文化事業であり、住民の歴史意識形成にかかわる重要な文化運動でもある。それゆゑ編さんの過程そのものが地域に根ざしたものでなければならぬ。山形県内のほとんどの市町村で市町村史の編さんに着手しており、編さんのスタイルも定着しつつある。わかりやすい市町村史を求める声もあるが、何十年に一度の事業であるから、たんなる史料調査にとずく基礎的な研究の上になつて、通史や概説が書かれるべきである。そのためには市町村内はもちろんのこと県外にある史料も広く調査研究しなければならぬ。史料は「史料編」として公開保存し、多方面から研究していくことが必要である。また、歴史資料は整理して目録を作成し、いづれ必ず資料の調査・収集・整理・保存・公開の場としての資料館建設につながる視点で取扱い、歴史資料の保存運動の一環をになわなければ

と考えて実施してきた。市民の歴史資料についての関心と認識を深める意向をふくめて毎夜二回地域文化講座を開いているが、これも本年度八年目を迎え、近年は受講者の層が広がっている。当初から地域の歴史と文化をテーマに、古文書の解説を中心に講座をすすめている。

二

一九八二年一月、酒造業を営んでいた旧鈴木弥兵衛家住宅を尾花沢市が譲り受け、移転・復元して歴史資料館として活用するための検討委員会が発足した。四月に東北大学工学部教授で県文化財保護審議委員の佐藤功氏らに建物の調査を依頼。七月に曳家をおこない、復元完成したのは一九八三年二月である。その間、十数回におよぶ資料館検討委員会がもたれ、つぎのような「基本構想」をまとめ、市長に答申した。

1 名称
芭蕉・清風歴史資料館基本構想

2 目的
めざましい社会変貌の途上にあつて、急速に散逸消滅しようとしている本市の古今の歴史的資料や文献記録を収集・調査・研究・保存して後世に

残すとともに、それらを広く市民や公私の研究者の観覧、閲読研究に供し、もつて歴史を尊重する気風をたかめ、物心両面にわたる本市発展の基礎をつちかおうとするものである。

3 資料館の基本的性格

(1) 尾花沢の生成の過程や古代から現代に至るまでのわれわれの祖先の生活文化の諸相を把握しまた明らかにする。

(2) 市民が本市の歴史を深く認識するとともに、広く多くの人が理解するよう施設を開放し、その利用に供する。

(3) 歴史的資料の収集・調査・研究・保存等については、本市ならびに関連地域を対象とし、芭蕉が来訪したころの生活、文化を主にする。

4 資料館の機能および事業

(1) 収集・整理・保存

ア 芭蕉・清風関係を中心に、本市の歴史資料や文献記録等を収集、さらに本市に関連のある自然関係資料も収集する。
イ 収集は、じゅうぶん考証のうえ、買い上げ、寄贈および寄託等により実物を収集する

ほか、必要に応じてマイクロフィルム等を利用し、また映画、ビデオコーダー等により記録保存する。

ウ 収集した資料は、整理を行なうとともに必要な補修を行ない、貴重な資料や文献記録等を完全に次代に引き継ぐために大切に保存する。

エ 将来、貴重な史料となる本市関係資料については、散逸消滅するおそれがある場合、委託をうけその保存がはかれるようつとめる。

(2) 調査・研究

ア 市民が正しい歴史的認識を養うとともに、確実な資料を後世に残すため、正確な資料考証と綿密な調査活動を行なう。

イ 特に調査では、現地保存されている資料や他の機関で所蔵している資料についても把握する。

(3) 展示・閲覧および普及

ア 本館内展示と移動展示を行ない、展示は資史料とその時代の生活とを結びつけるよう行なう。

イ 資料館の建物が雪国の代表

的な町家造りであることを
じゅうぶんに考慮し、雰囲気
に調和した展示を行なう。

ウ 市民の歴史教育のために、
史料の閲覧、調査研究成果の
提供およびパンフレットの発
行等を行なうとともに、資料
館事業の普及につとめる。

エ 児童、生徒等の集団来館の
利用についても支障のないよ
う配慮する。

(4) 研究成果等の刊行

本市の歴史および文化に関す
る研究成果等の刊行を行なう。

5 職員組織および機構

(1) 職員は、資料館に必要な専門
的職員および一般職員とする。
専門的職員確保のため、養成、
研修を行なう。

(2) 組織機構に尾花沢市地域文化

振興会および市民編さん事務局
をおくような方向で検討する。

6 資料館の規模等

(1) 位置および敷地

尾花沢市尾花沢三五五五
全面積 七二六・六九㎡

(2) 規模等 延四三五・二㎡

資料館としての機能をはた
すため諸室が必要であるが、
雪国の代表的な町家造の風格

を失わないようにする。

(3) 設備および装置

耐火金庫および消火設備が
必要である。また、資料館と
して欠くことのできない設備
として、写真撮影、複写に必
要な機械、器具、防盜設備、
各種警報装置等が必要である。

7 類似施設との連携

他の公私立の類似施設とは、有
機的な連携をはかるとともに、そ
の所蔵品目記録等を整備するなど、
円滑な館活動ができるようにつと
める。

8 市所蔵の資料等

市民図書館所蔵の郷土資料およ
び市立学校所蔵資料の一部を資料
館に移管する。

9 維持・運営

資料館の完成までの管理運営は
尾花沢市教育委員会が行なうが、
完成後は管理運営を尾花沢市地域
文化振興会に委託する。

尾花沢市地域文化振興会および
市史編さんについては、別途検討
するものとする。

市では、この「基本構想案」を全
面的に受け入れ、「尾花沢市芭蕉・清
風歴史資料館の設置及び管理に関す
る条例」(昭和五十八年三月二十八日

条例第三二号)と同条例の「施行規
則」(昭和五十八年五月一日規則第四
号)を定め、市長が選定する半官半
民の地域文化振興会(当初二十名、
現在二十九名)に資料館の管理運営
を委託した。

三

尾花沢市地域文化振興会は、尾花
沢市に関する歴史的、文化的遺産の
調査研究、収集、保存およびその活
用をはかり、地域文化の発展に寄与
することを目的としている。歴史資
料館づくりの土台に前述の市史編さん
事業や地域文化講座(古文書解説)

めていく過程で、多くの歴史資料が
調査され、筆写あるいは写真撮影さ
れた。市史編さんの基礎となる歴史
資料の保存と整理、研究と公開が重
要であるとの観点から歴史資料館建
設の気運が高まっていた。市史編さん
事業は、本来ならば歴史資料館が
活動を開始し、十分な歴史資料があ
つめられてから行なわれるのが望ま
しい。いわば歴史資料館内の一つの
事業であるはずのものである。そう
考えて、歴史資料館内に市史編さん
係を移したのである。

歴史民俗資料館の場合、時代の進
展とともに亡失の危険のある貴重な
考古遺物や、破棄・散逸するおそれ
のある歴史資料や民俗資料等の文化
財を集めて、未永く保存し、広く公
開する施設である。尾花沢市では、
考古遺物や民俗資料の収集・保存は
文化財保護委員会がおこなっており、
将来、文化財保護施設の建設を考え
ている。芭蕉・清風歴史資料館は、
江戸時代の町家(店蔵と母屋)を保
存、再利用したものであり、考古遺
物や民俗資料の収集、保存には適し
ていないからである。歴史資料館の
建築物がすでに、この地域の絶対的
な大きな歴史的資料であるから、芭
(以下15ページへつづく)

特殊形態の史料の取扱い

原島陽一

前回、史料の装備に関してその種類や用途などを述べたなかで、特殊形態の史料については、それぞれに適した装備の必要性を指摘しておきながら、特殊形態の個々のケースに対して説明を加えるに至らなかった。その背景としては、特殊形態の史料装備の方法が未だ十分に検討されていない状況にも一因があったといえる。しかし、通常の装備には適合しない特殊形態であればこそ、装備への関心も需要も高いはずである。

ばならない諸条件が多いので、その点も合せて検討することにした。

◇ ◇

特殊形態史料の装備のむづかしさは、第一にその形態にあるというべきだが、実際には複雑な不定形をした史料が、それほどあるわけではない。珍しい特殊形態があったとしても、それを予測記事にするよりは、他の事例などを参考にしながら個別に対応した方が良策と思う。われわれが取扱う史料のなかで、通常の装備では処理しきれない形態とみられるのは、大きさが普通より大きい小さいかの、特大・特小形態のものが主流をなしているといつてよからう。

ところで、今回は装備の種類を中心に述べていたので、史料の形態別による使途はわかりにくい点もあつたかと思うが、特殊形態の代表というべき巻子本については、すでに前回に述べておいた。また、地図や図面などのうちで大形に属する史料類には畳紙が適当であることも前述し

た通りである。なお、畳紙へ入れた地図類の配架のことを前回は言及できなかったが、一般の書架では棚からはみ出して保存上も好ましくない。少なくとも、奥行の深い大形の棚を用意してこれに配架すべきであり、理想としては地図類専用の抽出に収納しておきたい。それも木製の簞笥ならば最高である。この場合の配架は、家文書から地図だけを別置する形式となることはいうまでもない。序ながら、このほかにも特殊形態のうちの大型史料などで他の史料と並べておくのが不都合なものは、適宜の措置をした上で別置配架した方が都合のよいものが多い。

◇ ◇

特殊形態の史料のなかで、取扱いが面倒なものであつて事例が多いのは小形の史料であろう。大きさはハガキまたはそれ以下と小さく、ことに表裏ともに文字や図形が一面に書かれ（または印刷され）ているものが扱いにくい。具体的にいえば、藩札などの紙幣類、明治以後に出現するハガキ、裏書きのある手形類、富札や質札、それにやや大きい米切手などである。この種の史料の特色として、一点でなく多量にまとまつて残っている例が多いことが、特別

な取扱いを必要とさせることと関係があると思う。その上、これらにはラベルを貼ることができないものが多い。見た目が悪いというよりも、ラベルを貼る空白の余地がないのである。史料の外辺に僅かな余白を探してラベルの一端を糊付けできなくはないが、ラベルがとび出した形になつて、見た目も悪いし史料を破損する危険があるので、止めた方がよいだろう。

従つて、この場合の装備はラベルの役割を兼ねたものとならざるを得ない。その前に、ラベルを貼ることのできない史料に対する番号類の表示をどうするかという問題がある。

一つは、ラベルを貼る余地はなくても多少の余白はあるだろうから、その余白へ直接、記入する方法がある。史料と番号類とを密着させることはできるが、やはり史料の原形尊重の立場からこの方法は避けたい。とすれば、ラベルを貼れない史料は番号の表示を間接法にするよりほかはない。管理や利用には多少の不便が生じてても、史料の原形保存のためには例外として無ラベル・無表示のまま保存することを認めるようにしたいと考える。そのためには、装備に番号類を表示して代行させることが不

可欠となる。

小形史料の装備の考え方としては、まず、一枚ずつ別個に扱うか、数枚をまとめておくかに分かれる。内容や状況によつて事情は左右されるから、直に断定しかねるけれど、同種の史料であれば数枚ずつにまとめておくのも一法であろう。次に、具体的な装備の方法には、台紙を利用するのと特製の袋に入れるのと、二つの方法が考えられる。台紙には、史料の二カ所位をとめられるような糸の仕掛けを作つておき、これに史料を挿し込んでいく。糸でなく紙を使つてもよいが、紙では切れやすい。いずれにしても、糸などの色がにじまないことが条件であり、止め易いからといってゴム紐を使うことは許されない。台紙のままだと表面が擦れるし、ことに多量の場合は重ねて保存するためにも、かぶせ式の覆い紙をつけておきたい。この方法は、平常は表面しか見ることができぬが、糊付けしたわけではないからいつでも外すことができ、台紙の大ききによつて一枚の台紙に貼る史料の枚数を調整することも可能である。

にしておけば、中味の識別に便利であろう。全部を透明の用紙で作れば袋のまま裏表とも見ることができ、袋の強靱性に不安がある。それとは別に透明用紙の耐久性についても検討が必要である。

台紙と袋との比較では、互に一長一短があつて速断しかねる。補強性や表面のみの利用ならば台紙が優れているが、裏をみるために台紙からはずす手間とそれによる損傷を考えると袋の方が勝っている。同形の史料が多量の場合には、袋に入れてまとめて配列すると史料の部分だけがふくらむから適量に区分する必要がある。これは台紙の場合にも起るので、表面の擦れを完全に防ぐには版画の保存のようなマスキングをつけねばならない。これは裏面の利用が不自由になる欠点がある。なお、右の二方法のほかにも、市販のストック・ブックやアルバム類の転用が考えられるが、素材面で不安があることや、右に記した史料のふくらみ現象が著しいことなど欠点が多いように思う。

なお、冊子型史料にみられる丁間の挿物や綴じ紐に結びつけられた書付類など——いわゆる史料の付属物も特殊形態に属するが、これらは本

体の史料との関係があつて、取扱いは一層複雑になる。これに似たものに図書に挿入されている別表や正誤表などがあるが、図書館での装備では、表紙裏などに糊付けする例が多く、これを史料に応用することはできない。付属物を移動や紛失から保護するための具体案を未だ見出せずにいるが、この問題は「史料の原形保存」のなかで前に取上げているので本誌34号参照してほしい。

◇ ◇

序に、史料における素材の差異と装備との関係について付け加えておく。史料には、通常の素材である和紙以外にも、金属、木材、繊維品などが用いられている。（ここでは勿論いわゆる文献史料を主対象としているのであつて、考古民俗資料などを指すものではない。）これらの素材の差が保存方法に影響を及ぼすのは誰もが知るところであるが、装備にも多少の配慮が必要である。例えば、ヘギ状の薄い木片などの割れ易いものは、封筒などへ直接入れずに厚紙類を添えて補強する。繊維品が史料の素材となる例は稀であるが、守袋や袱紗などに付帯品として混在することは珍しくないで、これらは必要に応じて薄葉紙で包み、表面のこすれを

保護しておきたい。板に書かれた高札の類に全面的な装備を施すには、外箱を用意することになるが、製作費用や収納の面で負担が大きいことは否めない。それに、この種の木製品は虫害や過乾燥による干割れに注意すれば、必ずしも外箱を作るには及ばないはずである。但し、文字面を保護するために覆いを付けるなどの措置は欲しいし、屋根つきの場合や四隅、または釣具などにはそれぞれ部分的な養生を施した方がよいだろう。伝来の過程で作られた書類入れの箱などは、そのまま保存すればよいと思うが、漆塗りの書札箱のように大切な書類を保存することを目的に丁寧に拵らえたもの場合は、装備を加えたくなる。しかし、本来が外箱であつたものに、さらに屋上屋を架す必要があるかは疑問で、よほど特別な場合には個別の事情で判断するしかない。なお、漆製の容器の場合に、中の史料のために防虫剤を使用しているのを見かけるが、樟脳もベンゾール系の防虫剤も漆を変質させるから注意したい。概して、史料の保存には、装備に限らず、薬品類に依存しないように心掛けるべきであつて、それは素材の如何を問わない原則である。

奥三河農村における年貢免状について

鶴岡 実枝子

幕藩制国家の基盤となった石高制は太閤検地と兵農分離をテコにして成立したとされるが、その貫徹は政治的経済的諸条件の地域偏差を伴ないつつ進行したことは、従来報告されている各地の初・前期の検地帳や徴租法の事例で窺われる。特に幕領の場合、関東や北遠地方の山間部農村に「石高・永高制が施行されたことの意味をめぐって石高制との関連性、ひいては石高制の果たした機能などが論議されている。もともと戦国大名の遺制とみられる「實高制」と、天正一七・一八年の徳川氏による五方国総検で実施された「永高制」とは截然と区別されるべきものとの指摘がある。

「地方凡例録」に「右の實高今も武蔵・相模・上野辺にてハ稀にありて、石高は元よりなく、多くは無反別の村なり」と記し、永高については「今も永高の場所は永別永盛といふことありて遠州榛原・豊田・周智の三郡、三州八名郡辺は検地石盛もあり、石高もあり、水帳もあれども永高を用ひ、石盛に永盛の幾百幾拾文を掛寄せせて永高とし、永匁實文を高五石代にして其高を役高と唱へ、諸掛り

物等は此高を用ひ、検地石高ハ納所高と呼び、年貢ハ納所高にて納む、畑方ハ永盛匁實文幾幾百文として納むることなり」と述べている。

さて「史料館所蔵史料目録第三十九集」に収録した「三河国八名郡乗本村菅沼家文書」は、この「地方凡例録」に永高村と指摘された東三河の山間部農村を居所とした旧家に伝わった史料群である。すなわち菅沼家は戦国期に三河の国人衆として武士団を形成した菅沼氏の一族で、今川氏の被官として長篠城に拠った長篠菅沼氏の末裔で、松平氏に攻略されて落城した天正元年長篠より乗本村小川（当時宇川）に移り住んだと伝えられる。乗本村の幕末期の村高は五六〇石余となつてゐるが、そのうちの四〇〇石余は寛文一貞享期の新開検地による打出高であり、総反別の七一％余が畑方、しかも新開畑の過半が下畑という典型的な山間部農村であつた。所領関係は天正一八年徳川氏の関東移封後、池田氏の吉田領、慶長五年同氏の播州姫路転封によつて再び徳川氏領、同八年開府後は幕領となつて幕末に及んでゐる。

ところで菅沼家が移住した当時の乗本村がどのような集落を形成していたかは詳かでない。家伝によると菅沼家初代の乗本村への移住は乗本六郷の荘官矢頭氏の招請によるものという。因みに乗本六郷とは菅沼家が居所とした宇川の他、本郷（乗本）・牟川・久間・蔵平・大平の六集落を指す。荘官なるものの実態は詳かでないが、この矢頭氏の娘を妻とした二代定常は、徳川氏に臣従したと思われる矢頭氏の江戸移住後、大名主を勤めたが、のち長女に信州座光寺浪人福田嘉平次なる者を迎えて名主役を譲り、自らは長男定房と共に別家し、更に末子定政をも別家させて乗本六郷の氏神社の神主家と定めたという。矢頭氏はそれらを伴わせ管掌していた上層農民に在地小領主を想像すればよいのであろうか。

いづれにしても史料裏付は皆無であるが、菅沼家に残された最古の年代の史料は次のようなものである。

一高拾三石壹合	賀平次
一高四石九斗五升八合六勺	
一高三石貳斗七升壹合	七郎左衛門
一高貳石九斗三升三合五勺	彦二郎
一高三石貳斗	与八郎
惣合貳拾七石三斗六升四合一勺	

田畑屋敷共二
慶長拾年巳ノ霜月吉日
鵜川村

乗本村における初検の時期は明らかではないが、開府後の三河幕領の検地は慶長八・九年とされている。従つて上掲の「鵜川村高付」は差出書を欠くが、同時期の検地の結果を鵜（宇）川村に宛て書下したものと

思われる（もともと乗本村にはこの時期の検地帳は現存せず、現在鳳来町乗本の公民館に保管されている旧乗本村文書の最古の水帳は元和末年頃と推測される「本帳」である）。

これによつてみると、当時の小川の名請人は僅か五人で、最高の高を持つ賀平次は菅沼家二代の娘婿で名主の嘉平次であり、隠居分家後の菅沼家（七郎左衛門）は五石弱、他の三人は二・三石台の持高であつた。

ところで旧乗本村文書中に現存する年貢免状の最古のものは代官彦坂九兵衛（光正）の発給した慶長一六年である。

乗本村亥可納御年貢之事
公田九貫五百文
此取銀八百貳拾五匁者
内わけ
百四拾五匁者
百貳拾匁者
そつかわ
うかわ

百拾匁者 ひさま
百貳拾匁者 くらたいら
九拾匁者 大平
貳百四拾匁者 本郷

右十二月廿日以前二皆済可仕者也
慶長十六年

亥十一月五日 彦九兵衛

発行年月日	代官名	銀高	皆済期限
慶長16.11.5	彦坂九兵衛	825	12月20日
〃 17.11.26	〃	885	12月10日
〃 18.11.21	〃	885	〃
元和3.11.10	〃	872	〃
〃 5.11.11	曾根源藏	991	〃
〃 7.11.23	中川勘介	1,036	〃

る貢高表示の免状は上掲表の通りである。公田高九貢五百文は固定しているものの、銀納高は時相場によつたものと思われる。次に続く年号の免状を示すと次の通りである。

乗本村亥年免相定下札

一高百五拾石 高辻

此取銀九百九拾三匁

右之通御成ヶ相究候、惣百姓不殘寄合此免状を見、そんとくなき様二念を入わりをいたし、極月廿日以前二皆済可仕者也

寛永拾貳年 鈴木八右衛門
亥極月三日 鳥山牛助
乗本村庄屋 惣百姓中

元和七年から一三年間の空白があつて、石高表示に切替つた年次を確認できないが、『北設楽郡史』に引用されている田嶺村庄屋「小野田家銘書」に「元和八戌年田嶺村貢高、石高に御直し被成候」とあつて、乗本村の「本帳」の成立年代を元和末年と推測したのに符合する。もつとも貢高九貢五〇〇文が一五〇石となつたものの、取銀高は貢高時と殆んど変化がない。また免率の記載がないことから、貢高同様に村高ではなく年貢高であつたことは指摘して大過なからうと思われる。

乗本村における以後の免状の変化を記すと、初回の新田検地が施行された寛永一八年の免状には新田高八石余が付加され、石当り五匁四三の取銀（本田分は石当り一〇匁〇八）の他、小物成として綿七〇目の代銀三匁五分の徴収が始まつている。その後慶安元年の新田改で五石余が加わり、形式的に皆銀納制をとることに変わりはないが、同年以後本田高一五〇石の取銀高は一貢三〇〇目一貢六〇〇目台を前後し、増徴の

あとが窺われる。そして寛文四年からは永高制が採用されている。

辰之年免相定下札

高百五拾石 八名郡乗本村
一永三拾匁文

此取銀壹貫六百七拾四匁

高拾三石五斗式升四合
一永貳貫七百五文 同所新田

此取銀九拾四匁五分

取銀合壹貫七百六拾八匁五分

外銭貳百五拾七文

銀三匁五分代綿 役

（割付文言以下略、日付は十一月十五日、代官鈴木八右衛門）

みられる通り高五石一永一貫文の割合で機械的に永高に換算されており、徴租法の実質的な変化は認められず、永高制移行への必然性を探ることは困難である。敢えて憶測すれば貨幣納地代の現実により適合すると考えられたのであろうか。

乗本村において石高表示が復活し、田方米納・畑方銀納の等級別による反取法の精細な免状が交付されるようになったのは延宝五年以後のことに属する。但し免状の形式が整備され、田畑別に米納・銀納の区別が指示されたとはいへ、現実には本田・屋敷・新田畑別に平均免が採られ、金と銭による完全な貨幣納で

あつたことは、庄屋が組別に発行した割付状で明らかである。なお近世初頭の貢高制から寛文一延宝期の永高制の移行過程で表示されていた年貢高が、反取法を経て石高に基く厘取法へ移行する過程で村高にすり替つて定着する時期の確認は後考に俟つことにする。

以上、紙幅の関係で大雑把な紹介に終始したが、『地方凡例録』の記述を時間的にも検討する意味で、三河国山間部農村の一例をとり上げてみた。乗本村の場合、耕地の開発が遅れ、しかも耕地と認定された過半が下畑という劣悪な生産条件の下では、石高制が本来志向した水田稲作による米納年貢の実現は望むべくもなかった。前代の遺制とみられる初期の貢高制の採用は、年貢請負人的地位にあつた代官の裁量によつたものと思われる。もつともその貢高一二年貢高が現実の生産力と如何なる関係にあつたかは不明である。

幕領の年貢免状一貢租体系の整備を幕藩制国家確立の一指標とする研究動向の中で、乗本村に見られる事例をどう評価するかは今後の課題である。

『徳島藩職制取調書拔』(上・下巻)の索引作成

廣瀬 睦

本書が徳島藩職制機能を窺い知る公用記録を中心とした、各種の史料を編集した翻刻であるという特色を考え、その主題に相応しい索引作成を試みた。ここでは、これまで索引作成に携わった経験をふまへ、作成過程を説明しつつ史料索引に関する所感を述べることにしたい。

作成の過程 索引は地名・人名・役職名索引の三部門立てとした。

(一)本文筆写原稿段階①部門(項目)の決定②索引語(抽出項目・見出し語)の採集範囲選定③索引語採集マニュアルの提示④筆写原稿一枚毎の頁付け⑤索引語の指定(原稿に部門別指定色でのサイドライン付け)⑥サイドライン付け点検(脱漏防止)⑦カードへ転記(B6版カード使用・カード上端への部門色染付け・原稿頁記入・必要事項注記)⑧カードとサイドラインの照合↓原稿に確認済の斜線付け↓カード未採録補充(二)本文校正刷段階①原稿段階のサイドラインを初校刷に転記(採集語再点検)②頁付け(カードの原稿頁を

校正刷の頁に変更)③配列方法の決定④カードの編集(索引名辞の訓み書込み・参照関連項目の附記・副出カード作成)⑤配列(類項目毎に分類)⑥索引原稿(カード体)の記載内容・体裁の指定⑦出稿

(三)索引校正刷段階①カードと索引校正刷↓索引校正刷と本文との照合(誤記の訂正)②総点検(本文へ確認の丸囲い付け)③本文の看読(未点検箇所を検出)④部門別凡例出稿⑤配列の同定・確認⑥参照・関連参照指示の挙按⑦印刷(本文↓索引)

以上のような手順に従って作業を進めたが、次の四点が三部門共通の問題としてあげられる。①本文印刷後(上巻は刊行後であったが、下巻は筆写原稿で着手)に開始できないため止むなく頁付けの変更を行い、慎重に照合を繰り返す必要があった。②本文の校正と同時進行であるため、僅かな時間で上下巻六一六頁分に対して索引九九頁分という膨大な量をこなさなければならなかった。③カード作成のスピード化を計って同

項目も重出し、項目を必要以上に絞り込むのを避けた。そのため一項目に調整する迄に数度の同定を行った。

④索引語採集の偏り(是正のため、点検を行ってもカードの編成・脱漏語の搜索等が困難であった。なお頁指定の煩雑さを避けるため、上下巻通し頁付を用いた点と、カードにも部門色を染付して、どの部門へ分類するかを即時に判断できるようにし、誤入を防いだのは利点であった。

索引の内容 地名索引 地名の訓みを確定できない場合が多く画数順とした。諸橋轍次著『大漢和辞典』総画索引に依拠し、少画より親字画順に配列し、同字画数の字を部首順、さらに同一部首を親字画順に並べた。

辞典における字画序列の法則性・編纂作業には感嘆したが、その法則の一般的適用には難がある。画の算出に時を費し、利用者も同様の不便さがあるであろう。しかしながら、画順の煩雑さ以上に、分量が少く訓みを確定できない場合、画順も詮方ない。なお吉田東伍著『大日本地名辞書』(明治40年刊)には五十音・画引と二種の索引が付けられている。人名索引 身分に関係なく人名及び寺社名を採録した。電話帳方式五十音順配列を採用した。第一字の音こ

とに片仮名・平仮名・漢字順で訓のみを標準とせず、姓の頭字を同音から同字(同音異字は少画より)の集合で並べる。国語辞書形式音順の場合、いこま、は、いむら、の前となるが、この方式は生Ⅱ五画、井Ⅱ四画で生の集合は井の後と逆になる。

配列の際、異字が混在せずみやすい利点がある。姓名の訓みは慣用的訓みに従い、訓不明・難読なものは便宜上音訓とした。徳島藩家中の姓名の訓は自費出版の宮本武史編『徳島藩士譜』に依った。人名の採集は容易であるが、カードには人物の経歴をできるだけ史料から採録する必要がある。生没・役職・役職任免日・記載史料の日付等を附記することで判別が可能となる。同姓同名については、明確に区別できる者は別項目としたが、異なる人物であることが史料的に検証し難い場合、同系と見做して一項目にまとめた。また蜂須賀家当主・家族は史料の性質上名乗を書いてないが(蜂須賀)として一括し、(蜂須賀)豊光院(五代綱矩嗣子吉武夫人豊)と本書解題の系譜に従って注記を施した。また本文に制限帳類六冊を収録してあることから、徳島藩全家中分限(給禄)による在任地・身分(家格)および在郷在住

かが識別できる様、在村名を記した。役職名索引 本書の特徴を端的に現わすのがこの役職名索引の部門であろう。採録の範囲に、徳島藩組織機構（管理業務部局・業務内容）つまり職制に関するものと共に、徳島藩特有の家中以外の町人・百姓（身居・身振・夫役呼称）の身分（家格）等を含めた。前記の地名・人名の概念が固定化した固有名詞であるのとは異なり、索引語採集の可否を決定するのは仲々難しかった。特に職名が重層的連語を成す場合、一語と見做すか、区分標準をどうするか厄介である。分別しすぎてしまうと特有な表現が埋没するという問題がある。それ故、慎重な取捨選択を心がけ、項目の表記にあたり史料記述を優先させた。例えば、浮手代*（関連参照）元々支配とし、両方を項目として採用した。従って、単語項目と連語項目と区別した痕跡を残している。次に配列の三例をあげておく。

〔例〕

①医師学問所 ②塩方御郡代所
—— 物産方 —— 御代官
寺嶋——

③拾人者頭（徳島）（撫養）——

配列方法は、見出し項目をたてて下位に同系列の職種（例①）を続け、

同字省略（例②）の形式である。この形式は内容と系統が把え易く検索に役立つ、系列的索引（副見出し構造）である。単独的索引（羅列型）は、項目が分散しかえって見づらい。また見出し項目以下は、一応音順としたが、職制系列的体裁も併用した。職称のうち地名を冠する場合（例②③傍点部分）は地名の次の職名を項目とした。この配列により、史料内の個別説明的記述が再構成され、体系的把握が可能となる。

三部門共通の取り扱いとして、接頭語「御」については、その有無が身分格禄の相違を明示しているので史料記載のままとし、配列に際しては「御」を無視して、二字目の語順とした。また役職名称のうち地名・人名を含む場合、夫々の部門に重出させた。尚、同義語は一方を本項目とし、他方から参照を付けた。対置語・連語・関連の強い項目は、関連参照を付して集約した。当初の一目から副出する訳で、索引項目量が意外に増す結果となった。

史料索引の効用 作業の過程は、史料記述を点検できる最終的機会であって、解読文字や字体の誤りを発見できる。また史料に目次がある場合、詳しくれば検索手段の役割も果

すであろうが、もともととは総体の把握のためである。それに対し索引は、迅速に情報の入口を示しランダムに検索できる点で、機能を異にしている。更に、索引語の採集とは、史的用語の検出であるから、史料解釈上諸研究に寄与できるであろう。それに関連して、本文史料に当時の史料名称と内容・伝達方法が記述されており、当時の呼称を史料中に探究するのに生かされるべきであろう。今後対象史料の性格により、史料名称索引も考えられる。近世史料目録の史料名称附与（標題表記）は、当時の名称の採用を指摘されながら、各々の史料からの事例採集が立ち遅れている現状にある。

各種索引への応用 これまでの史（資）料集は、史料一点で完結するものを除き、殆どが編年分類による編成が用いられている。これらにも多用なレファレンスに対応しうる検索手段が作成されるべきだろう。また、史誌類・年表索引・地名の所在を視覚で検索できる地図（絵図）索引・絵索引ならびに史料分類目録の索引があげられる。

史料索引の課題 一般的には、原本解釈を等閑にするような過度の便宜性や、採録語選定の際の主観による

偏りなどが問題として考えられる。しかしこうしたことは、極力避けるべきであろう。索引項目の決定は、史料内容や機能・関連性を的確に示し、且つ現在研究上看過されている事項でも、新たな光彩を発するかも知れないので、あまり狭く限定しないようにしたい。とはいえ一定の史料群のなかから限られた部分を翻刻したという制約がある。要求される厳密さに対して、時間・経費等の制約という相反する条件の下での索引作成の宿命を克服するため、作業過程の省力化、原史料の用語法を尊重した索引作成手法の開拓、索引の体裁などいくつかの課題がある。事例を積み重ねつつ適切な方法で取り組む必要がある。索引の項目データは、原史料の文脈に含まれて存在する事項を引き出し、多用な検索要求に応える情報資料である。それはとりもなおさず史料目録の作成に役立たせるための史料学研究の基礎固めなのである。

最後に、史料索引の作成は、いまだなお端緒にいたった許りと言えようが、利用者の要望をもとに類例異例を積み重ね、そのあり方を問うことでよりよい索引が作成されることを期待したい。

山城国 冷泉町文書

(現、京都市中央区室町通二条上ル冷泉町)

この史料所在調査は、一九八三年九月一二日～一四日の三日間、京都市中央区室町通二条上ル冷泉町五三番地松井隆治氏宅に所蔵されている近世初頭から明治期に至る冷泉町の町方文書を対象に実施したものである。同文書については、既に一九八二年六月から千葉大学助教吉田伸之氏を中心に調査が進められており、今回はその第三次調査を当館の事業として実施したものである。調査員に依頼したのは吉田伸之氏のほか京都大学教授朝尾直弘、神戸大学助手横田冬彦、京都大学研修員安国良一、東京大学大学院生杉森哲也の各氏。

ほかに三井文庫研究員賀川隆行、愛媛大学助教菅原憲二、同志社大学大学院生宇佐美英機、東京大学大学院生小川保、同西坂靖の諸氏の御協力を得ることができた。なお、当館からは安藤正人が参加した。

冷泉町というのは、平安後期以来京都の経済を支える中心的道路として発展し近世には繊維を中心とする商業の町として繁栄した室町通のちょうど真ん中あたりに位置する由

緒ある町である。近世初期には上京一条組親町八町のひとつであったが、のち北隣りの鏡屋町とともに上京下一条組の室町二町組を構成し、明治に至っている。

さて、この町については、以前より「京都冷泉町記録」と題する京都大学所蔵の全四冊の影写本と、それをさらに写した東京大学史料編纂所本が知られており、近世初頭の京都の町政や町の構造、町の生活を伝える稀有な史料として利用されてきた(一九七七年には『日本都市生活史料集成一』に翻刻収載された)。しかし、京大本第四冊末尾に、「京都市室町二条上ル矢代庄兵衛氏所蔵 大正七年四月影写」とあるものの、その原史料の所在については長く不明のままであった。ところが、一九八二年六月以来の松井家所蔵文書の調査の結果、京大影写本の原史料(全部ではない)を含む冷泉町の町方文書が、同家に多量に保存されていることがわかったのである。

松井家(松井屋勘兵衛と称し、現在も「普勤」商店として金欄裂地

卸商を営む老舗である。一方、京大影写本にみえる矢代庄兵衛家もやはり「普田屋」といい、松井家の本家にあたる。矢代家は、近世にしばしば町年寄を勤め、明治初頭にも年寄の地位にあつた家であるが、現在冷泉町には居住していないというところである。従つて、冷泉町の町有文書は、明治・大正と元町年寄矢代家に伝えられ、その後、時期ははっきりしないが、矢代家から松井家に引き継がれたものと考えられる。

さて、史料は「冷泉町所蔵」と記された小さめの木箱(明治一九年丙戌九月十一日冷泉町ヨリ預り品 布告在中)の記載のある大きい木箱におよび特に記載のない大きい木箱に収められ、虫喰い・破損は少なかつた。引継目録のようなものがないために正確なことはわからないが、破損・汚損の大きい史料がかなり廃棄されていると考えられる。なお、文書類のほかに、権現講・下鴨社神楽講の木札、町印・印鑑箱なども保存されている。

調査にあたっては、概要を知るために、保存の原状を尊重しながらとりあえず、①近世初期、②人別、③一件、④冷泉町、⑤町組・大仲、⑥町触、⑦借屋請状・引取証文・寺請

状・送り一札、⑧近代、⑨その他、という九項目に分けて仮整理をおこなった。まず①であるが、京大影写本「京都冷泉町記録」全四冊の内、第一冊「天正拾年冷泉町東面大福帳」の原本を確認、第二冊「天正拾三年正月拾一日大福帳」と第三冊「慶長拾貳年正月吉日大福帳」については発見できなかった。第四冊は書付型文書五九点の集成であるが、この内五八点の原文書を確認した。以上これまで知られていた史料のほか、

慶長期から元禄期に至る町入用関係帳簿八冊など、重要な初期町方文書が発見された。④冷泉町、の項目には享保以降の町入用その他を収めている。⑤は町代改儀一件を中心とした町組関係史料である。⑥の町触は膨大なもので、ほぼ一年分ごとに括られており、総点数は約六〇〇〇通にのぼると思われる。⑦の借屋関係証文もかなりの量があるが、一回の借屋人移動にあたって作成される四種類の証文が大半バラバラになつているので照合・復原作業が必要である。⑧は主として布告類である。

以上ごく簡単に調査報告をしたが、同文書は現在も調査作業が進行中であり、公開利用体制は整っていないので、その点留意されたい。(安藤)

歴史資料保存利用機関連絡協議会(Ⅱ史料協)関東部会設立準備会に参加して

去る昭和五十九年五月二十四日二

十五日の両日にわたり、東京都八丈島、民宿友喜荘を会場にして、史料協関東部会設立準備会が開催された。

参加団体(氏名―敬称略)は栃木県教育委員会総務課文書館開設準備班(小林邦男・阿部昭・仲田凱男)、群馬県立文書館(岸栄・田中康雄・阿久津宗二)、茨城県歴史館(佐久間好雄・桐原邦夫・大塚博)、埼玉県立文書館(秋葉一男・泊善三郎)、埼玉県立浦和図書館(吉本富男)、戸田市市史編さん室(佐藤勝巳)、千葉市役所統計課龍崎純夫、大和市史編さん係(鈴木邦男)、藤沢市文書館(高野修)、横浜開港資料館(佐藤孝・西川武臣)、東京都公文書館(小林辰男・山際実・松平康夫・白石弘之・山中玄造・水野保・水口政次・田沢元久)、それに個人参加としては石渡隆之(前国立公文書館)、大野瑞男(東洋大学)また、国立史料館からは、

第一日目は、九時三十分羽田発全

日空八二三便で飛立ち、一〇時二〇分に八丈島に到着した。一時三〇分

分から総会が開催され、史料協会長吉本富男氏の挨拶について議長に原島陽一氏を選出し議事に入った。議事は、まず史料協関東部会の会則について審議されたが、その骨子は次の通りである。

(名称及び会員等)

第一条 この会は史料協関東部会といい、事務局を会長の所属する機関に置く。

2 会員は史料協会員のうち関東甲信越地区の機関・個人を以ってこれに充てる。

(目的)

第二条 この会は、会員相互の連絡と提携を図り、研究協議を通じて、歴史資料の保存利用活動の振興に寄与することを目的とする。

(事業)

第三条 この会は、前条の目的を達成するために、次の事業を行う。

一、会員相互の情報交換

二、歴史資料の保存利用事業に関する調査及び研究

三、研究会・講演会・実務講習会等の開催

四、その他、必要な事業

(会費)

第四条 会員は別に定める会費を納入するものとする。

(役員)

第五条 この会は、次の役員を置く。

会長 一名
副会長 一名
委員 若干名
監事 一名(以下省略)

この会則により、まず、会長の選出が行われ、東京都公文書館長の小林辰男氏に決定した。

昼食後の研究会(1)は吉本富男氏の「今後の文書館運動について」と題し、①我国文書館の類型、②文書館と情報公開との関係、③古文書、行政文書の収集基準、④文書館法制定の必要性と現下の課題、という内容で発表された。

研究会(2)は高野修氏の「行政文書の収集基準について」と題し、①文書館業務の問題点、②行政文書(資料)と歴史資料、③受入収集基準(藤沢市の場合)、④受入収集基準といくつかの問題点、についての報告がなされた。

この後、入浴と夕食があり、夜は懇親会が遅くまで楽しく行われた。

第二日目は、朝食後に研究会(3)

がもたれ、安沢秀一氏の「日本におけるアーキビスト養成のために」と題し、①史料保存利用施設とアーキビスト、②アーキビストの必要とする学問的実務的基礎、③自己訓練コース・部内養成コース・部外研修コース・大学院教育コース、④史料協の役割、などについての発表が行われた。

ひきつづいて研究会(4)として、八丈町文化財委員葛西重雄氏の「八丈島の歴史(歴史の流れと風俗習慣)」についての講演があり、昼食後は、葛西氏のご案内により、貸切バスで八丈島を一周した。主な見学先は、八丈八景の一つである名古展望台、黄八丈織元、幕府の御船預り役の服部屋敷、陣屋跡、歴史民俗資料館、宇喜多秀家の墓などであり、葛西氏の蘊蓄に傾聴した。

こうして、わずか二日間ではあったが、充実した内容の準備会であった。また民宿友喜荘での新鮮な魚介や野菜の八丈島ならではの郷土料理の味も忘れられない。まことに有意義で楽しい旅であった。(森 安彦)

受贈図書

昭和五十八年度(二)

- (宮崎県) 佐渡原町文化財調査報告書
第2集 (佐渡原町教育委員会)
奄美史料 03 (鹿児島県立図書館奄美分館)
Kaban shop signs of Japan (Japan Society)
展示資料解説カード 2 (岩手県立博物館)
浄土曼荼羅 (奈良国立博物館)
東洋を奏でる民族楽器 (大田区立博物館)
板木の名宝展 (栃木県立博物館)
下野の職人展 (同右)
机 昭和57年度企画展 (青梅市郷土博物館)
相川の歴史 展示資料解説書 I (相川郷土博物館)
兵庫県立歴史博物館 常設展示ガイドブック
播州歌舞伎 (同右)
白隠とその時代 (沼津市歴史民俗資料館)
吉川霊華・みやびの世界 (サントリ美術館)
宮本記念財団調査報告 2
類縁機関案内 (東京・神奈川) 1983年版 (相模女子大学附属図書館)
学習院大学資料館叢書 第四巻
- 統計資料シリーズ No.26 (二橋大学経済研究所日本経済統計文献センター)
埼玉県立文書館落成記念 足利直義下文日本外交文書 大正十四年第二冊上巻・日本外交追懐録 (1900~1935) (外務省)
福島市史料叢書 第37・38輯
福島県塩田案内
(茨城県) 筑波町石造物資料集 上巻 (筑波町史編集委員会)
(茨城県) 新治村史 史料集 第一・二篇 (新治村史編集室)
史料調査報告 第二十六~三十集 (足利藩研究会)
太田市史 史料編 近世3
新編埼玉県史 資料編 4・19
岩槻市史 考古資料編
河田家文書史料集 第一・二巻 (法政大学近世文書研究会)
史料集 第四集—久枝区有文書— (同右)
浦和市史調査報告書 第十四集
流山市史 近代資料編 八木村誌・流山町誌
鳩ヶ谷の文化財 第八集 (鳩ヶ谷市教育委員会)
世田谷の民家 第2輯 (世田谷区教育委員会)
- 世田谷区遺跡調査報告 4 (同右)
喜多見 世田谷区民俗調査第3次報告 (同右)
野毛大塚古墳周溝緊急調査報告 (同右)
民俗学のおと (同右)
瀬田遺跡 (同右)
府中市中心部街道ぞい家並変遷図 (府中市教育委員会)
秦野市史 第三巻
秦野市史近現代懇談会記録 1
秦野市史自然調査報告書 1
(静岡県) 細江町史 資料編三
袋井市史 史料編四
浪ノ上第1号墳調査概報 (豊橋市教育委員会)
滋賀県議会史 第七巻
飛鳥へ運ばれた瓦 (宇治市教育委員会)
宇治市遺跡地図 (同右)
河内長野市史 第九巻
摂津市史 史料編三
羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 8 (羽曳野市教育委員会)
イラストでつづる羽曳野の歴史 (同右)
泉佐野市埋蔵文化財発掘調査概要 III (泉佐野市教育委員会)
泉佐野市埋蔵文化財発掘調査報告 II (同右)
広島県史 現代
古文書調査記録 第六集 (福山城博物館友の会)
- 熊本県議会史 第六巻
日田市統計書 第4号
文化財調査報告 第十一輯 (大分県九重町教育委員会)
宮崎県郷土資料利用の手引 第9集 (宮崎県立図書館)
図録黒船の来航 (横須賀市人文博物館)
東京の娯楽 (八王子市教育委員会)
現代日本の支配構造 (立命館大学人文科学研究所)
東京都公文書館所蔵地誌解題 一 往生院稻荷社御縁起 (往生院稻荷大名神奉賛会)
岩瀬山往生院六萬寺史 中巻拾遺・中下巻拾遺・別巻拾遺・別巻壹 (往生院六萬寺)
當山記載新聞集第一・二編 (同右)
仙台市博物館調査報告 第3号
昭和57年度秋田城跡発掘調査概要 (秋田市教育委員会)
天童市史編集資料 第三十二・三十三号
北海道市史 上巻
所沢市史 近世史料 II
千葉県のあゆみ
第16・18・19・20回 郷土史講座講義録 (船橋市郷土資料館)
我孫子の歴史を学ぶ人のために (二) (我孫子市教育委員会)
東京市史稿 市街篇 第七十四・産業篇 第二十七 (東京都)

都市紀要 二十九(同右)

文化財の保護 第15号(東京都文化課)

世田谷区社寺史料 第二集(世田谷区教育委員会)

育委員会

狛江市文化財調査報告書 第4集(狛江市教育委員会)

東京・八王子市石川天野遺跡(八王子市石川天野遺跡調査会)

狩野一信筆五百羅漢図(港区教育委員会)

横浜市史 資料編一 統計編・注釈編・資料編十九・二十・補巻・索引

関口日記 第二十二・二十三巻(横浜市教育委員会)

横浜市文化財調査報告書 第十三輯(同右)

見附市史 下巻(一)・(二)

小浜市史 藩政史料編一

新編岡崎市史 6・7

(大阪府) 阪南町史 上巻

愛媛県史 原始古代I・民俗上・資料編古代中世・文学・学問宗教・地誌I

船橋市郷土資料館第29・32・33・35・36回展示資料観覧の手びき

乾隆ガラスとアール・ヌーヴオー(サントリー美術館)

「商い」ビジネスの原点を探る(三井銀行)

神道大系 神社編五十一(神道大系編集会)

妙蓮寺の近世文書について(上島有)

渋沢敬三 下(渋沢敬三伝記編集刊行会)

高千穂学園八十年史(図録共)

江戸時代土地法の大系(石井良助)

鶴岡市史 資料編 荘内史料集19

(福島県) 南郷村史 第3巻

埼玉県議会史 第十一巻・(同) 資料編

大田区史 資料編 民俗

東京都古文書集 第一集(東京都教育庁社会教育部文化課)

館蔵品図録(石川県立郷土資料館)

神奈川県史 通史編3・別編1・各論編1・2

御殿場市史 第九巻

刈谷町庄屋留帳解説(刈谷市教育委員会)

新修大津市史 第六巻

大谷女子大学資料館報告書 第8・10冊

和歌山県史 中世史料一

広島新史 地理編

(広島県) 五日市町誌 下巻・資料

(徳島県) 池田町史 中巻

常設展示解説(栃木県立博物館)

石灰岩(化石)サンゴから洞穴遺跡まで(岩手県立博物館)

岡崎市のかたつむり類(岡崎市教育委員会)

専門情報機関要覧 兵庫版

立図書館

近世女性生活絵典(柏書房)

富士銀行百年史(別巻共)

三井両替店(三井銀行)

泉屋叢考 第貳拾輯(住友修史室)

東松山市史 資料編 第五巻

知床日誌(丸山道子)

新紋別市史

北上市文化財調査報告 第33・34集(北上市教育委員会)

仙台市文化財調査報告 第50・52・54・56・58・60集(仙台市教育委員会)

福島市史 別巻VI

古河市史 民俗編

鳩ヶ谷市埋蔵文化財調査報告書 第1・2集(鳩ヶ谷市教育委員会)

(千葉県) 岬町史

下郷後船橋市下郷後遺跡発掘調査報告書

(船橋市教育委員会)

下郷後遺跡所在確認調査概報(同右)

寺内・古作の民俗(同右)

船橋市の遺跡(同右)

船橋の民家 6(同右)

青梅市史料集 第三十一号(青梅市教育委員会)

農村社会研究室年報 一(新潟大学人文学部)

石川県史資料 近代篇III

新編岡崎市史 11・18・付録I

松阪市史 別巻一

大阪市史資料 第十輯

和歌山県史 考古資料

高野政所・慈尊院の歴史(山本智教)

資料調査報告書 第十集(鳥取県立博物館)

館)

紀州経済史研究叢書 第30輯(和歌山大学紀州経済史文化史研究所)

紀州史研究叢書 第24・25号(同右)

愛媛県史 資料編 学問・宗教

(高知県) 中土佐町史料 土佐国漁村調査書他・土陽高知新聞他(中土佐町教育委員会)

大悲王院文書(福岡市教育委員会)

明法寺神文書(同右)

飯盛神社関係史料集(同右)

明倫堂記録(宮崎県高鍋町)

和紙の美(サントリー美術館)

小松ゆかりの近代日本画工遺作展(小松市立博物館)

鳥取県立博物館 10年のあゆみ

鳥取県の自然と歴史 5(同右)

江戸幕府老中の勤務実態について(松平秀治)

宮城の研究 4 近世篇II(遠藤匡俊)

漁業紛争からみた近世村落の相互関係(同右)

近世の牡鹿半島における漁業紛争の処理(同右)

米沢市史編集資料 第十一・十二号

上山市史編集資料 No.36

藤沢 わがまちのあゆみ(藤沢市文書館)

(和歌山県) 貴志川町史 第二巻

大日本史料 第一編之二十二・第六編之三十九・第八編之三十一(東京大学史料

編纂所

大日本古文書 家わけ第十八・十九・幕末

外国関係文書之三十九(同右)

大日本古記録 言経卿記十二・建内記九・

猪隅関日記五・六(同右)

大日本維新史料 井伊家史料十三(同右)

日本関係海外史料 オランダ商館長日記

訳文編之四(上)(同右)

越後国郡絵図 一(同右)

編年百姓一揆史料集成 第十一卷(三)

書房

岩手の看板展(岩手県立博物館)

南陽市史編集資料 第十号

鳳来寺山文献の研究(川合重雄)

図説再見大阪城(大阪都市協会)

(和歌山県) かつらぎ町史

南日本文化研究所叢書 8(鹿児島短期

大学付属南日本文化研究所)

農工銀行の余裕金について(植田欣次)

大阪城四〇〇年の歴史展(大阪城天守閣)

室町水墨画・近世絵画(茨城県立歴史館)

古文書との語らい(目黒区守屋教育会館

郷土資料室)

正倉院展(第35回)(奈良国立博物館)

三〇四世紀の東国(八王子市郷土資料館)

特別展 狩野探展展(小田原市郷土文化

館)

東北の中世陶器(東北歴史資料館)

明治大正事件史展目録(国立公文書館)

江戸川区の民具展 衣食住(江戸川区郷

土資料室

世田谷の原始古代展(世田谷区立郷土資

料館)

天台寺(岩手県立博物館)

武蔵武士展示品図録(埼玉県立博物館)

化石の世界(栃木県立博物館)

上田築城四〇〇年真田史料展図録(上田

市立博物館)

サントリー美術館蔵品展 絵巻と文房

具

日本の街道事典(三省堂)

浅草寺日記 第七巻(金龍山浅草寺)

(北海道) 新編沼田町史

(北海道) 木古内町史

国典類抄 第十四巻(秋田県立秋田図書

館)

鹿角市史資料編 第九集

最上町史編集資料 第七・八号

(山形県) 泉田川土地改良区史(泉田川土

地改良区)

近世村落における農村荒廃と復興(立正

大学古文書研究会)

小山市史 史料編 近世II

八潮市史調査報告書 8

市原市史 資料集(古代編)

市原の歴史と文化財

日野市史 民俗編

狛江市文化財調査報告書 第2集

池丹城跡(花ヶ前盛明)

滑川市史 考古資料編・史料編

敦賀市史 史料編 第四巻下

(山梨県) 六郷町誌

各務原市史 考古民俗編(本文・図録)

飛騨下呂 史料I(岐阜県下呂町史編集

委員会)

袋井市史 通史編

ふるさと富士川 第四集(静岡県富士川

町教育委員会)

刈谷町庄屋留帳 第十一巻(刈谷市教育

委員会)

宇治市史年表

羽曳野市史 第五巻

泉大津市史 第二巻

松原市史資料集 第十四号

目で見る門真の歴史

西脇市史 本編

近世播磨の農民像(山田正雄)

広島新史 都市文化編・市民生活編・財政

編

古文書調査記録 第五集(福山城博物館

友の会)

改訂求道雑誌(岩国徴古館)

熊本県歴史の道調査 日向往還・史料編・

豊前街道・薩摩街道(熊本県教育委員

会)

宮崎県文化財調査報告書 第26集(宮崎

県教育委員会)

(宮崎県) 川南町の埋蔵文化財(川南町教

育委員会)

研究報告 第1号(高千穂商科大学経理

研究所

日本の民家百選(三井不動産広報室)

年表・花王90年のあゆみ(花王石鹼資料

室)

東京電力三十年史

限りなく大空へ 全日空の30年(資料編

共)

日本金属工業50年史

北海道開拓記念館所蔵松前藩主一族書状

集 I

(岐阜県) 川上村史 通史編史料編

松阪市史 第十二巻

資料中川蔵人政孝日記(藤堂藩史研究会)

BEITRÄGE ZUR JAPANOLOGIE

BAND 19(ウィーン大学日本文化研究

所)

日本外交文書 1930年 ロンドン海軍会議

上(外務省)

札幌市中央図書館郷土資料目録 新訂版

北海道所蔵簿書件名目録 第2部 開拓

使公文録東京出張所原本の部(その13)

(北海道総務部行政資料課)

北海道刊行行政資料目録 第17号(同右)

教育研究資料件名目録 XII(北海道立教

育研究所)

北海道立図書館蔵書目録 第15分冊

札幌大学図書館増加図書目録 第3巻

札幌大学図書館所蔵雑誌目録 1983年版

蔵書目録(八戸市立図書館)

宮城県図書館蔵小西文庫和漢書目録

仙台市民図書館郷土資料目録 13

仙台市博物館収蔵資料目録 (V)

国史談話会寄贈古文書目録 (東北大学文

学部国史研究室)

秋田県歴史資料目録 第十九集

秋田県教育基本資料目録 第四集 (秋田

県教育委員会)

山形県史料所在目録 第2集

市立米沢図書館所蔵郷土関係寄託文

書目録

山形県関係新聞記事索引 昭和57年版

(山形県立図書館)

山形県関係文献目録 追録6 (同右)

歴史資料館収蔵資料目録 第12集 (福島

県文化センター)

蔵書目録 第26集 (福島県立図書館)

茨城県歴史館蔵書目録 (山本文庫)

取手市史資料目録 第五・六集

茨城県藤代町史資料目録 第二集

栃木県史料所在目録 第13集

栃木県立図書館蔵書目録 第6巻

小山市史料所在目録 第9集

群馬県近世史料所在目録 22・23

群馬県立文書館収蔵文書目録 1

群馬県郷土資料総合目録 (追録6~8)

(群馬県図書館協会)

増加図書目録 昭和57年度 (伊勢崎市立

図書館)

埼玉県行政文書件名目録 地理編III (埼

玉県立文書館)

埼玉県行政文書目録 第2集 (同右)

近世史料所在調査報告 19 (同右)

埼玉県史料所在目録 第四集

大正・昭和史料目録 (浦和市総務部市史編

さん室)

埼玉県立図書館所蔵川越に関する資料目

録 (埼玉県立川越図書館)

埼玉県立川越図書館参考調査室蔵埼玉関

係図書増加目録

教育百年史関係文書目録 (上福岡市教育

百年史調査委員会)

資料目録 昭和53年3月現在 (上福岡市

郷土資料館準備室)

郷土資料館 (準備室) 新収蔵資料目録 (同

右)

東京都立中央図書館地方史誌関係図書目

録 本編

東京都立中央図書館蔵書誌目録 追録版

東京都立中央図書館蔵書目録 補遺II

資料もくろく 1983年版 (東京都生活文

化局広報部都民資料室)

整理済地蔵古文書目録 (V) (東京大学

地蔵研究所)

租税資料目録 第5集 (国税庁税務大学

校租税資料室)

東京都公文書館所蔵庁内刊行資料目録

19

豊島区史編纂室所蔵資料目録

旧多摩郡鎌田村名主橋本家文書目録 (世

田谷区教育委員会)

郷土資料室所蔵史料目録 一 (目黒区守

屋教育会館郷土資料室)

古文書目録 第五・六集 (小平市図書館)

東大和市古文書目録 (I) (東大和市教

育委員会)

里正日誌目録 (同右)

豊田武文庫目録 (法政大学図書館)

河田家古文書目録 (法政大学近世文書研

究会)

根岸家文書目録 (同右)

(以下次号)

(3 ページよりつづく)

蕉・清風関係の常設展示コーナー

と年二回程度の特別展示にとどめて

いる。展示部門についても専門業者

の手をかりず、全くの手づくりであ

る。しかも展示する歴史資料は、原

史料主義をとっている。

芭蕉・清風歴史資料館は、一九八

三年七月三日に開設したばかりの新

しい歴史資料館である。準備活動が

はじまってからわずか一年、あわた

だしいなかでのガイドブック「芭蕉

と清風―おくのほそ道・尾花沢―

(一九八三年七月三日発行 八四

ページ)、「つなきはし」の復刻(翻

字・解説)、「のれん」(「おくのほそ

道」・尾花沢)の製作をおこない、開

館記念品として関係者に配布した。

歴史資料の収集・整理・保存は、さ

しあたり開館にむけ、芭蕉・清風関

係資料を中心におこなった。調査研

究は、市史編纂委員会や文化財保護

委員会等の協力を得て、資料調査委

員会を委嘱して継続的・計画的に実

施している。展示は、特別展①「芭

蕉・清風資料展」(七月三日~八月三

十一日)、特別展②「上の畑焼一五〇

年展」(十月二十日~十一月二十

日)、常設展示「おくのほそ道・尾花

沢」をおこなった。年二回、資料所

蔵者等懇談会(九月二十九日、一月

二十八日)をおこない、所蔵者との

協力関係を深め、歴史資料の保存と

公開の必要を説き、相互に信頼をも

ちあえるように努めた。歴史資料館

が調査研究や資料借用の便宜を与え

て頂く感謝の意を表する会であり、

所蔵者の意見や要望を聞く機会にも

なっている。今後とも懇談会を重ね

ていきたいと考えている。

歴史資料館の使命は、資料の展示

にあるのではなく、歴史資料の調査

研究、収集、整理、公開、保存をと

おして地域住民に歴史や文化に対す

る理解を深めていただき、地域文化

を創造するための本拠となるべきで

ある。

報

第三〇回近世史料取扱講習会

今年度の近世史料取扱講習会は、(A)

一〇月一日～五日の五日間東京都会場(京都府立総合資料館)、(B)一〇月一日～一九日の五日間東京会場(当館)の両会場で開催される講習内容と講師は以下の通りである。

(1)文書館学序論(当館員) 安沢 秀一
(2)古代中世史料概論 佐藤 進一

A 中央大学文学部教授

B 東京大学文学部教授 石井 進

(3)近世史料概論

A 大阪大学文学部助教授 脇田 修

B 明治大学文学部教授 木村 礎

(4)近代史料概論

A 名城大学文学部教授 山崎 隆三

B 明治大学文学部教授 海野 福壽

(5)史料の保存科学

A 東京国立文化財研究所保存科学部部長 江本 義理

B 東京国立文化財研究所名譽研究員 岩崎 友吉

(6)近世の民俗資料

A 国立民族博物館教授 杉本 尚次

B 国立歴史民俗博物館教授 福田アジオ

(7)史料の補修

A 宮内庁書陵部専門官 古関 豊

B 宇佐美直八

(8)村方史料読解(当館員)

A 浅井 潤子 B 藤村潤一郎

(9)町方史料読解(当館員)

A 大藤 修 B 鶴岡美枝子

(10)幕藩史料読解(当館員)

A 森 安彦 B 笠谷和比古

(11)史料の整理・管理Ⅰ(当館員)

原島 陽一

(12)史料の整理・管理Ⅱ(当館員)

A 安澤 秀一 B 安藤 正人

(13)史料の所在調査法(当館員) 山田 哲好

〇評議員会

本年六月一日に評議員会が当館に於て開催され、館長の任期について評議され、報告事項として教官の停年・本年四月一日付人事異動について報告された。

なお任期満了に伴う改選によって史料部会関係は次の各氏となった(敬称略・任期昭和59・7・1～61・6・30)

阿部秋生(実践女子大学教授)伊地知鐵男(元早稲田大学教授)齊藤正(東京国立博物館長)児玉幸多(学習院大学名誉教授)上田直鎮(国立歴史民俗博物館長)

林大(国立国語研究所名誉所員)古島敏雄(東京大学名誉教授)松田智雄(東京大学名誉教授)山本達郎(東京大学名誉教授)以上再任、坪井清足(奈良国立文化財研究所所長)中井信彦(慶応義塾大学名誉教授)宮川満(羽衣学園短期大学

学長)以上新任。

〇運営協議会

本年五月二十八日に国文学研究資料館運営協議会が開催され、教官の停年その他についての議事を協議す。なお森安彦(当館第一史料室長)が八月一日付で新任された。

〇館内研究会

第七七回(昭和59・2・23)

【近世文書の整理と管理】の構想(その2)

第七八回(昭和59・3・27)

第七九回(昭和59・4・17)

第八〇回(昭和59・5・29)

【目録編成の基礎理論】の諸問題(その1・3)

第八一回(昭和59・6・26)

近世史料の整理と管理 山田 哲好

第八二回(昭和59・7・24)

近世史料の形態についての研究課題と目録での表記法 大藤 修

〇定期刊行物の発行予定

1「史料館研究紀要」第一六号を本年十月に刊行予定

史料保存利用施設の国際環境と史料館文書館学序論のための覚書 安沢 秀一

近世地方文書用字考 浅井 潤子

幕末維新期村落女性のライフコースの研究(一) 森 安彦

續刻飛脚関係摺物史料 藤村潤一郎

2「史料館所蔵史料目録」第四〇集

「信濃国松代真田家文書目録(その三)」は本年九月、同四一集「信濃国埴科郡松代八田家文書(その二)」及び同四二集「武蔵国多摩郡蔵敷村鈴木家文書」は来年三月刊行予定。

3「史料館叢書」七として「依田長安一代記」を来年三月東大出版会より刊行。

人事異動

〇昭和五九年四月一日付

新任 第一史料室教授 森 安彦

〇昭和五九年四月一日

第一史料室長併任 森 安彦

第二史料室長併任 原島 陽一

第三史料室長併任 藤村潤一郎

情報閲覧室長併任 安沢 秀一

〇文部省科学研究費補助金交付

◇奨励研究(A) 九〇万円

日本近代化過程の農村問題と報徳運動 大藤 修

史料館報 第四一号

昭和五九年(一九八四)九月二十九日発行

編集・発行 東京都品川区豊町一ノ二六ノ一〇

国文学研究資料館内

国立史料館

電話(七八五)七一二(代)

印刷所 勝美印刷株式会社